

# 初心者用ピアノテキストの作成と活用

福 井 昭 史

Creating and using piano textbooks for beginners

Akifumi FUKUI

長崎女子短期大学紀要 第48号 令和4年度 別刷

*Reprinted form*

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 48 : 55 - 61

2023

# 初心者用ピアノテキストの作成と活用

福 井 昭 史

Creating and using piano textbooks for beginners

Akifumi FUKUI

## 1 はじめに

長崎女子短期大学幼児教育学科では、1年生を対象とする声楽及びピアノの実技を主とする科目「保育と音楽表現」で使用する初心者用『子どもの歌によるピアノテキスト』を平成4年度に作成した。本論では、作成の背景とそれに至る経緯、テキストの構成、その活用等について述べる。

## 2 テキスト作成の背景

令和3年度までの音楽実技を主とする科目「子どもの歌と伴奏法」と「保育と音楽表現」では、『こどものうた200』『続こどものうた200』（チャイルド本社刊）の掲載曲を主な教材とし、ピアノの弾き歌いを課題として学習を進め、学習で取り上げた季節ごとの子どもの歌や生活の歌を課題とする弾き歌いの実技試験を年間3～4回実施していた。その実技試験では、満足できる成績の者は全体の2割にも満たず、残念ながら授業の成果は十分とはいえない実情であった。その要因は、学習課題の難易度が学生のピアノ演奏技能の実態に合っていないことにあると考えられる。

コロナウイルス感染拡大による自粛があったとはいえ、小中学校の音楽の授業では歌唱が主な活動であるため、歌うことについてはある程度のレディネスはあるものの、ピアノの演奏については個々の学習経験の差が大きく、本学での学習成果に影響しているといえる。そこで平成3年度入学生からは、年度当初にピアノの学習経験を主とする音楽経験調査を実施し、ピアノ実技の授業を能力別のクラス編成によるものとした。

授業での学生の状況からピアノの未経験者が多いという実態はある程度予測できたものの、調査結果は予想以上のものであった。令和3年度、4年度の入学生のピアノ経験年数を示した調査結果が次ページのグラフ①である。

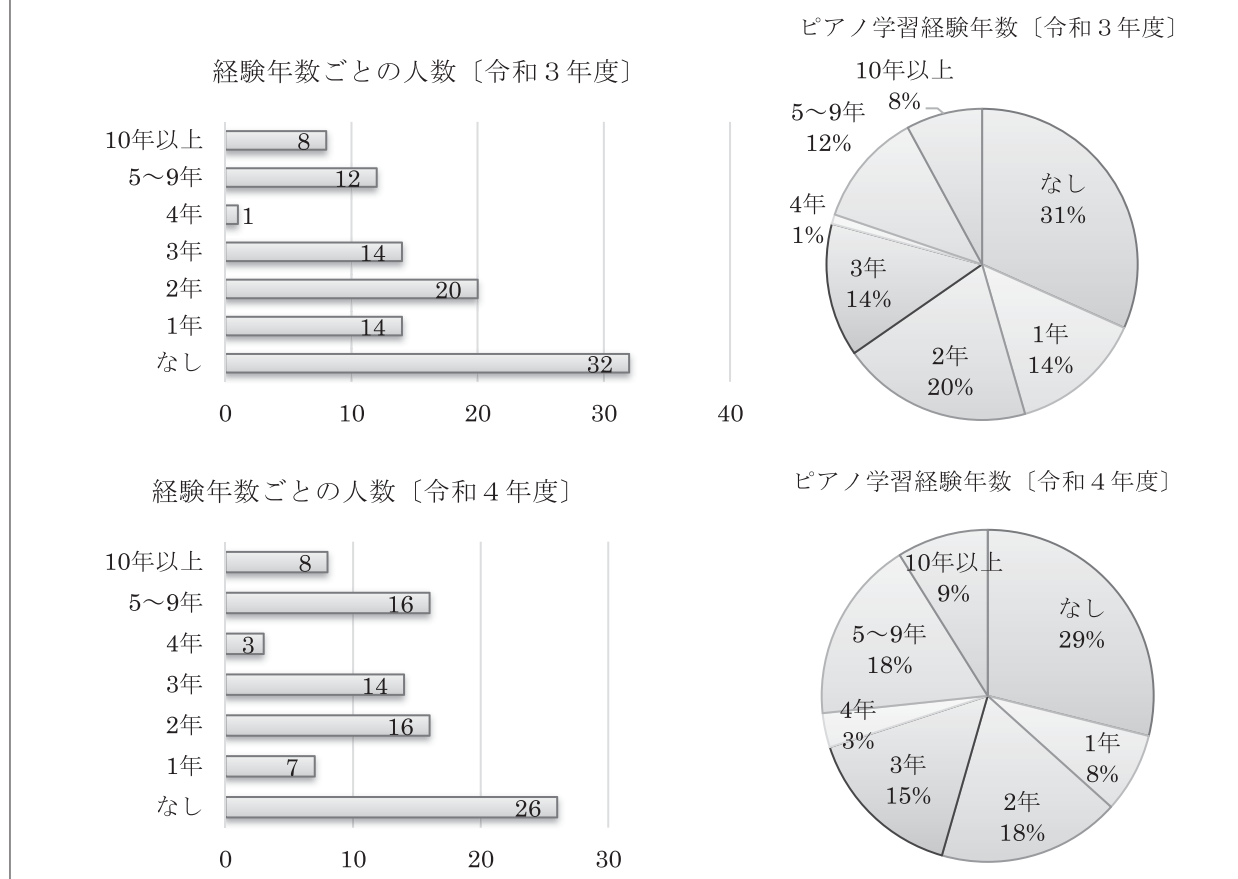
両年度とも、全く経験のない者が約30%、2年以下の経験者を含めると半数以上となる。また、1～2年の経験者の大部分は高校の授業での経験であることから、学生の半数以上は、ほぼ初心者という実態であった。

平成3年度に担当した初心者のクラスでは、課題の楽曲の演奏が不可能であることから、簡易伴奏譜を作成し対応していたが、それでもピアノの演奏は何とか出来ても、歌いながらとなると、どちらもできなくなる学生が大部分であった。

ピアノ初心者に対する一般的な学習は、バイエルやハノンなどのピアノ教則本をテキストとし、難易度の低い楽曲から高い楽曲へと進む学習の過程がとられる。楽曲中心カリキュラム<sup>1</sup>などと呼ばれ、音楽技能の学習にはよくみられるもので、教材の選択と配列が重要となる。とくに教材とする個々の楽曲の特質と難易度が重視される。

ところで本学では、保育士養成に主眼が置かれることから、幼稚園や保育所などで季節ごとに歌われる子どもの歌や生活の歌の弾き歌いを課題としており、それにバイエルピアノ教則本やブルグミュラーピアノ曲集などを併用していた。ところが、指定されたテキストに掲載されている子どもの歌や生活の歌の伴奏には、難易度が高いものも多数含まれており、前述のような近年の学生の実

グラフ① 【令和3年度・4年度の学生の実態】



態では、十分な学習成果が得られない者も少なくないのが実情であった。これまでは学生の多くが入学以前にピアノの学習を経験しており、ある程度の技能が備わっていたため、それでも大きな支障が生じなかったと考えられる。

2年間という限られた期間で初心者にある程度のピアノ伴奏の技能を身に付けさせるには、学生の実態に合った教材の開発と、それをを用いる独自のメソッドが必要であると考えた。

### 3 テキスト作成の要点

ピアノテキストの作成にあたっては、バイエルやハノンなどのピアノ教則本と同様の初心者教育のメソッドの機能を持つものであることを条件とし、最終的には子どもの歌の伴奏と弾き歌いができるようになることを目標とするものとした。

また、初めてピアノを演奏する者が1年間で習得できる質と量を想定し、作成にあたっては次の各点に留意した。

#### (1) 教材楽曲の選択と配列

ピアノ伴奏による弾き歌いが最終目標であることから、教材楽曲は唱歌や子どもの歌とした。

右手の動きの難易度を考慮し、構成音が少なく音域の狭い歌から音域の広い歌へと配列した。

具体的には、第1段階ではド～ソの5音による旋律の「ちょうちょう」「メリーさんの羊」など、第2段階ではド～ラの6音による旋律の「きらきら星」「チューリップ」など、第3段階では1オクターブに至る音域の広い旋律の「こぎつね」「虫の声」などのように技能の向上に留意した選曲と配列にした。

#### (2) 右手の旋律

右手は歌の旋律を基本とする単旋律とした。

市販されている子どもの歌の楽譜は、歌詞のとおり右手が旋律を演奏するものが多い。その特徴は芸術歌曲などの伴奏では稀で、とくに同音の連打は、歌詞のもつリズムの自然な流れを妨げる

ことにもなりかねず、また、そのことで演奏を困難にしている場合も少なくない。そこで、歌詞に伴う同音の連打が記された歌の部分は、伴奏では連打を省略することにした。

右の楽譜「どんぐりころころ」の、ソミミファミレドソミミレ、ミミソソラララドミミソの部分がある例である。

## どんぐりころころ

青木存義作詞・梁田 貞作曲

伴奏パターン(1)

どんぐりころころ ドンブリコ おいけにはまて さあたへん

## 基礎練習 3

【伴奏パターン・4拍子】

### (3) 左手の伴奏

左手は和音による伴奏とし、三和音の重音又は分散和音とし、I (ドミソ)、IV (ドファラ)、V (シレソ)、V7 (シファソ) を基本とした。

それらの和音による伴奏音型は、右の楽譜「基礎練習3」のように主として次の3パターンを基本とした。

・伴奏パターン(1)

和音の3つの音を同時に弾く。

・伴奏パターン(2)

8分音符でドソミソ、シソレソのように分散和音を単音で弾く。

・伴奏パターン(3)

はじめにドやシ、次にミソやレソの2音を数回(拍子やリズムによって回数は異なる)弾く。

伴奏パターン(1)

伴奏パターン(2)

伴奏パターン(3)

伴奏パターン(3)

伴奏パターン(3)

### (4) ハ長調を基本

前述の『こどものうた200』などの書籍に掲載されている歌の調はさまざまであるが、学習のはじめはハ長調による演奏を基本とした。

それに加えて学習の初期に取り上げる音域の狭い旋律の歌については、その後の学習の深化を想定し、テキストにはハ長調、ト長調、ニ長調に移調した楽譜も掲載した。

## 4 テキストの構成

作成した『子どもの歌によるピアノテキスト』は、60ページの目次のように、レッスンI~Vと「子ども達の生活の歌」による構成である。

(1) レッスン I

レッスン I は左右の指の基礎練習である。

旋律を演奏する際にド～ソの音と対応する左右の各指の動き、1 オクターブに及ぶ音階練習と、伴奏の和音を弾く左手の指使いと伴奏パターンに慣れるための学習課題を示している。(右の楽譜「基礎練習 1」、前ページの楽譜「基礎練習 3」)

レッスン II～V は教材楽曲を 2 つの視点からそれぞれ段階に分けて提示した。その 1 つは、音域の狭い旋律 (①ド～ソ、②ド～ラ) から音域の広い旋律へという流れであり、もう 1 つは、調号の付かないハ長調から調号を伴う調へという流れである。また、各々の楽曲には難易度の異なる伴奏パターンを示した。

基礎練習 1 [ハ長調]

練習(1)

練習(2)

練習(3)

音階練習

(2) レッスン II

はじめてピアノで演奏する楽曲として、誰もが知っている下の表の 4 曲を選択した。ド～ソの 5 音による旋律で 2 拍子と 3 拍子、伴奏の和音は主和音と属和音を基本としている。

各々の楽曲のページには、複数の伴奏パターンとハ長調に移調したものが含まれている。

次ページの楽譜「ちょうちょう」は、このテキストで最初に演奏する楽曲で、ハ長調の 3 つの伴奏パターンによるものと、3 パターンの伴奏を含むハ長調のもの 4 種類を掲載している。

楽曲名	拍子	伴奏和音
ちょうちょう	2	I、V を基本
メリーさんの羊	2	I、V 7 を基本
ブンブン	2	I、V を基本
かっこう	3	I、V 7 を基本

(3) レッスン III

指の基礎練習を示した後に、ド～ラの 6 音の旋律による下の表の 5 曲の歌を掲載した。

2 拍子と 4 拍子、伴奏には I、IV、V、V 7 の主要な和音が用いられている。

楽曲名	拍子	伴奏和音
きらきら星	4	I、IV、V、V 7
チューリップ	2	I、IV、V、V 7
むすんでひらいて	2	I、IV、V 7
はと	2	I、IV、V 7
つき	2	I、V、V 7

(4) レッスン IV

レッスン I の 4 曲とレッスン II の中の 2 曲『きらきら星』『チューリップ』をト長調とニ長調に

移調したものを掲載した。

ハ長調で学習した楽曲をヘ長調、ト長調、ニ長調に移調して演奏することで、黒鍵を含む調号の付いた調の旋律の演奏に抵抗感なく取り組めることと、調や調号についての理解を深めることをねらいとしている。

(5) レッスンV

歌の旋律が1オクターブに及ぶ広い音域の楽曲を12曲掲載した。曲目は、次ページの目次のとおりである。

拍子については、2拍子が6曲、3拍子が1曲、4拍子が3曲であり、6拍子は全編を通じて『おもいでアルバム』だけなので、『ちょうちょう』と『ブンブンブン』を8分の6拍子に編曲したものを『ちょっと優雅な虫さんたち』として最後に加えた。

子どもの歌は2拍子が多く、3拍子と6拍子は少数に限られている。

ヘ長調の『まつぼっくり』と『お正月』を除いて全てハ長調である。

(6) 子ども達の生活の歌

幼稚園や保育園で歌われる生活の歌の中から演奏の容易な楽曲を4曲掲載した。

テキストは以上のような構成で、子どもの歌等25曲、基礎練習などを含む全60ページである。1つの歌に対する伴奏が複数あるところに特徴がある。

5 テキストの活用と指導計画

授業「保育と音楽表現」の目標は、子どもの歌などの弾き歌いができるようになることであり、そのためには、歌唱力とピアノ演奏の技能を身に付ける必要がある。ピアノについては約3割に及ぶ全くの初心者を含む学生全員が、1年間で簡単な伴奏であれば演奏でき、それに合わせて歌うことができるようになることである。

前述のとおりテキストには、1つの歌に対してパターン異なる数種類の伴奏と、ヘ長

ちょうちょう

野村秋足訳詞・スペイン民謡

伴奏パターン(1)

ちょうちょう ちょうちょう なのはにとまれ なのはにあいたら さくらにとまれ

C G C G C

さくらはなの はなからはなへ とまれよ あそべ あそべよ とまれ

G C G C

伴奏パターン(2)

ちょうちょう ちょうちょう なのはにとまれ なのはにあいたら さくらにとまれ

C G7 C G7 C

さくらはなの はなからはなへ とまれよ あそべ あそべよ とまれ

G7 G C G7 C

伴奏パターン(3)

ちょうちょう ちょうちょう なのはにとまれ なのはにあいたら さくらにとまれ

C G7 C G7 C

さくらはなの はなからはなへ とまれよ あそべ あそべよ とまれ

G7 C G7 C

ヘ長調-伴奏パターン(混合)

ちょうちょう ちょうちょう なのはにとまれ なのはにあいたら さくらにとまれ

F C F F C7 F

さくらはなの はなからはなへ とまれよ あそべ あそべよ とまれ

C7 C F F C7 F

調やト長調に移調したものとを掲載しているが、それら全ての演奏を要求するのではなく、演奏できる歌の数を増やすことを目標とした。

授業は、演習2単位の通年科目で、前後期それぞれ15回、年間30回である。ピアノと声楽・コード奏法とを隔週で実施しているため、各期7回の授業である。

前期は、レッスンⅢまでの9曲を、後期はレッスンⅤ以降の楽曲を課題とした。(右の目次「子どもの歌によるピアノテキスト」参照)

カリキュラムの基本は、音域の狭い旋律の歌から広いものへと演奏できる楽曲の数を増やすことである。それに加えて、同じ歌でも伴奏パターンの異なるものや移調したものへと学習を深化させることで知識や技能の向上を図ることにした。

テキストに掲載されている歌の伴奏は簡易なものであるが、初めてピアノを学習する学生がそれらを演奏できるようになれば、弾き歌いも可能となり授業の目標が達成されたといえる。また、学習を通して成就感や達成感を味わい、進んで学習に取り組もうとする意欲が高まり、得られた知識と技能を活用し、その他の楽曲の演奏も可能になると考えられる。

テキストの巻末には「学習のステップ【テキストの使い方】」(次ページの図)を示し、学習の流れの周知を図った。

なお、同じ初心者でも、学習が進むにつれ技能に差が生ずるので、指導に当たっては個々の進捗に合わせて、パターンの異なる伴奏を課題にするなどの工夫を行うことにした。

## 6 指導の実践

令和4年度に担当した12名は全て初めてピアノを学習する学生たちで、3名ずつの4グループで

## 子どもの歌によるピアノテキスト

レッスンⅠ	基礎練習 1	指の練習	ハ長調	2	
			ヘ長調	3	
	基礎練習 2	音階練習	ト長調	4	
			ニ長調	5	
	基礎練習 3	2分音符、4分音符、8分音符のリズム	ロ長調・変ニ長調	6	
			伴奏の和音	7	
基礎練習 4	伴奏パターン	4拍子	8		
基礎練習 5	伴奏パターン	3拍子	9		
レッスンⅡ	練習曲(1)	ちょうちょう	スペイン民謡	10	
			メリーさんの羊	アメリカ曲	11
	5音の旋律(ドー)	プンプン	ポヘミア曲	12	
			かっこう	ドイツ民謡	13
	基礎練習	右手の指の基礎練習	さまざまなパターンの練習	14	
レッスンⅢ	練習曲(2)	きらきら星	フランス民謡	15	
			チューリップ	井上武士作曲	16
	6音の旋律(ドー)	むすんでひらいて	ルソー作曲	17	
			はと	文部省唱歌	18
			つき	文部省唱歌	19
レッスンⅣ	練習曲(3)	ト長調とニ長調	ちょうちょう	スペイン民謡	20
			メリーさんの羊	アメリカ曲	21
			プンプン	ポヘミア曲	22
			かっこう	ドイツ民謡	23
			きらきら星	フランス民謡	24
			チューリップ	井上武士作曲	25
レッスンⅤ	練習曲(4)	広い音域の旋律	こぎつね	外国曲	26
			虫の声	文部省唱歌	27
			めだかの学校	中田喜直作曲	28
			こいのぼり	えほん唱歌	29
			春の小川	文部省唱歌	30
			とんぼのめがね	平井康三郎作曲	31
			どんぐりころころ	梁田貞作曲	32
			大きな栗の木の下で	外国曲	33
			おもいでアルバム	本多鉄磨作曲	34
			まつぼっくり	小林つや江作曲	35
			お正月	滝廉太郎作曲	36
			ちよつと優雅な虫さんたち		37
			ごあいさつのうた		38
子ども達の生活の歌			おはようのうた	渡辺茂作曲	39
			おててをあらいましょう	作曲者不祥	40
			おかたづけ	作曲者不祥	41
					42

授業を実施した。

前期は『ちょうちょう』の伴奏パターン(1)から始め、全ての学生がレッスンⅡの4曲を5月までに、レッスンⅢの5曲を含む9曲を前期末までに演奏できるようになった。

この間に実施した実技試験では、ほとんどの学生が満足できる演奏をしていた。はじめの数曲を演奏できたことで学習方法を理解し、自信をもって意欲的に練習に取り組む姿勢がみられた。そのことが学習成果に影響したと考えられる。

入学後の同時期に学習を始めた学生も、前期末になると技能に差が生じたのも確かである。隔週のピアノの授業に加えて希望者を対象とする初心

者クラスを受講している学生は、レッスンを毎週受けられるため技能の向上が顕著であった。その中には複数の伴奏パターンや移調したものを演奏できる者も数名みられた。

後期の授業では音域の広い旋律の歌に取り組み、演奏できる楽曲のレパートリーを増やすことを目標にした。

大部分の学生が12月までにレッスンV全12曲中の10曲程度を演奏できるようになった。テキスト中の25曲全てを学習し、その他の楽曲に取り組んだ者も数名みられた。

後期が終了する2月までには大部分の学生が易しい歌であれば弾き歌いができるようになると思われる。

学生には、調号のある調にも取り組ませたが、ハ長調で演奏できる楽曲は、移調しても大部分が演奏でき、学習方法として、旋律と伴奏のパターンをハ長調で十分に学習することが有効であることが分かった。

## 7 課題と改善の視点

初めてピアノを学習する学生に対してテキストの活用が有効であることが実証された。一方、指導の過程で次のような改善の視点も明らかになった。

- (1) 学生は楽曲の演奏ができるようになることに喜びを感じ学習意欲を高めるようである。一方、指の練習などの基礎練習は好まないのも、同じページ数であれば楽曲数を増やす。
- (2) 初心者が旋律を演奏する際の指使いには工夫が必要である。例えば、隣り合う2本の指の間

## 学習のステップ

【テキストの使い方】

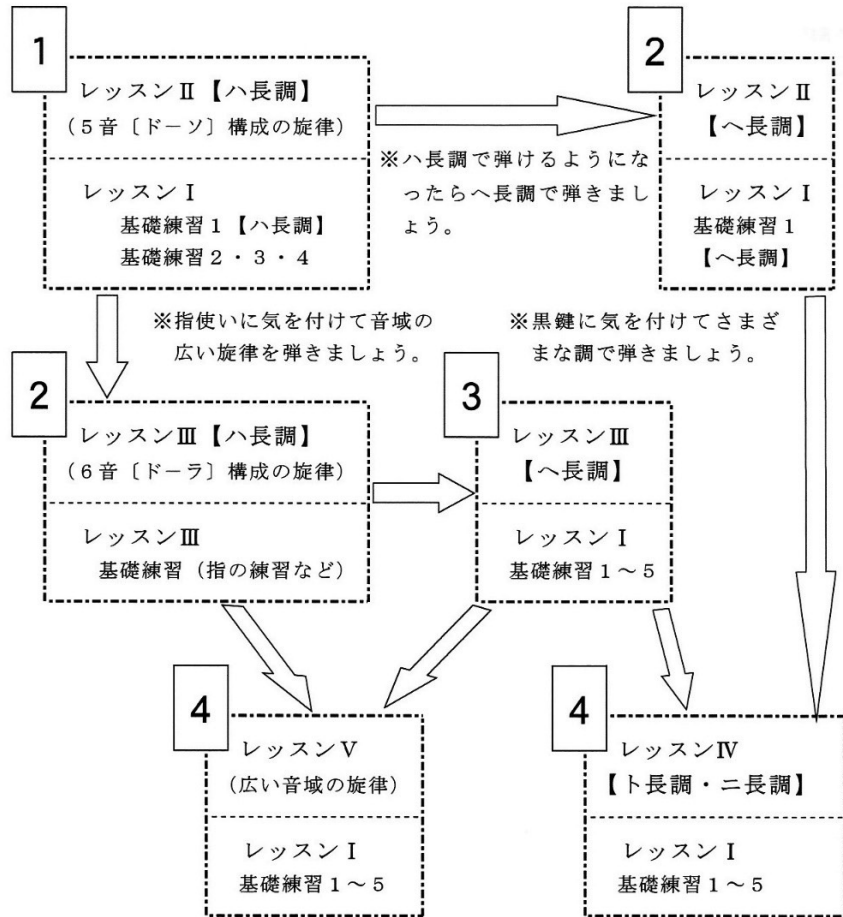
ピアノの学習は、難易度の低い楽曲から高い楽曲へと進めます。

☆それぞれの楽曲を学習するにあたってレッスンIなどの基礎練習、指使いや指の動きのパターンの練習を随時取り入れるようにしましょう。

テキストでは、右手は歌の旋律、左手は和音による伴奏を基本にしています。左手の伴奏には和声進行と音型にいくつかのパターンがありますので、それらに慣れてください。

このテキストでは、次のような2つの流れで学習を深める構成になっています。

その1つは、構成音の少ない旋律から広い音域の旋律へという流れ、もう1つは、白鍵だけで演奏できるハ長調から、黒鍵を含むへ長調、ト長調、ニ長調へという流れです。



を開く指使いはミスが多い、1と2の指は器用に動くなどであり、それらを考慮し子どもの歌の旋律の特質を生かした指使いを細かく記述する。

- (3) 旋律と和声、調や移調の理解、読譜力を高めるために、楽譜にコードネームを記述する。
- (4) 自主的な学習を促すには、学生と指導者に学習の計画、流れを十分に周知する。

以上の視点に基づいて、次年度のテキストとそれによる学習の改善を図ることにした。

<sup>1</sup> 山本文茂著『音楽科教育法・小学校音楽教育講座第3巻』音楽之友社1983.4 p.66